

『紅葉先生の追憶』

泉鏡花作

「夜具は持つてゐまいな」

私が田舎から出て始めて紅葉先生の許へお邪魔に
上るやうになつたのは忘れもしません十九の年の十
月、まさに十九日の朝でございました。私が最初先
生にお目にかゝりたいといふ考へを起したのは、何
でも其の一二年の前に先生がお出しになつた「色
懺悔」を讀んだ時でございました。無論其れは私
が未だ田舎に居る頃の事でした。

併し紅葉先生にお目にかゝりたいといふ考へを起
しては見たものゝさういふ人が今現に東京にいらつ
しやることやら、又いらつしやらないことやら、そ
れすら辨へない、つまり西も東も知らない本當の田
舎者なのでございました。

で、愈々其の素志を達する事になりましたが、最
初の考へでは新橋へ着いたら直ぐにも先生のお宅へ

お尋ねして願つて見よう、と思つたのでしたが、
いて見ると田舎者の悲しさに却々そんな勇氣は出
しません。今日はお尋ねしよう、明日はお伺ひしよ
う、と心組ばかりは夢にも忘れはしませんでしたが、
さうかうしてゐる内に何時か一年許りといふもの空
しく經つて了ひました。併しさうかと云つて他に當
てがあつて来た譯ではないのですから、學資と云つ
ては素より用意も無し其の難澁さつたらありません
でした。

が、其の頃金澤の高等學校にゐた私の親友が、
「むざ／＼國へ歸るといふのも誠に残念ではあらう
けれど、喰へなければ仕方がない、一旦茲は國へ歸
つて徐ろに再舉を計つたらどうだ。」と云つて呉
れたのでした。私も餘りの苦しさから「成程」
とつい其のつもりになりましたが丁度其の時です。
私の友人の一人が先生の御縁續きで下宿をしてゐる
人の處に居たものですから、其の御縁故を便つて先
生への添書を頼み、やつとお目にかゝるだけしかゝ
れるだけの準備が出来上りました。

私は早速其の添書を持つて横寺町の先生のお宅に参りました。今度は添書まで貰つて來てるのですから堂々たるものですが、併し中々さうつか／＼と入られたものぢやありません。しばらく門前を往つたり來たりしてましたが、其の内に到頭思ひ切つて入つて行きました。先生は其の時頭を五分刻にして一閑張りの机に向つていらつしやいました。

其の時先生の口を衝いて第一番に出た言葉は、こちらに來て大層困つてゐるやうな話だが本でも少しは讀めたかと云ふ事でした。勿論私は小説をやりにくて東京へ出て來たのですが、中々其れが本を讀む譯には参りません。前後二度許り圖書館へ通ひました。が、切つてどれを讀んで好いのか目移りがして一冊も見ないで歸つたやうな譯です。併し何より喰ふに困りますからもう國へ歸らうと思ひましたが、それにしてはせめて先生のお顔だけでもと存じましたが、お逢ひ下さいました私はもう思ひ残す處なく國へ歸れます、とやつとそれだけの事を云ひました。するとどうでせう。「お前も小説に見込まれたな」と云ひ乍ら先生はお笑ひになりました。「都合が出

來たら世話をしてやつてもよい」と、斯う仰言るのです。私はまるで夢ではないかと思ひました。最初は只お目にかゝるだけといふつもりがそんな結果になつたのですもの。私はもうお禮だつて満足に口へは出ませんでした。それで其の時始めて自分の名と所とを申し上げ夢中で門の外へ出ました。

扱て其の翌日再び先生の處へお尋ねした時には「狭いが玄關に置いてやる、荷物を持つて来い」といふお言葉です。そして其の時「夜具はある

まいな」と恚う仰言るのです。どうでせう、

「夜具はもつてゐるか」と訊かれたとしたら誰た

つて「ございません」とは云へないでせう。否、

到底云へたものぢやありません。つまり重ね／＼ご

厄介をかける事に氣がひけて何とも云ひにく／＼くな

つて了ひますが、「持つてはゐまいな、あるまい

な」と云はれるのだから「ございませぬ」が

餘り云ひにく／＼なく云へるやうなわけです。私は無

論持ちませんでした。で、其の日の夕方小さな机と

本箱を持つて玄關へ行きました。

「焼芋屋をさせても」

お小言は随分厳しい方でした。馴れないものは餘り厳し過ぎはしないかと思ふ位だつたでせう。が、實際御自分が一旦お引受けになつた以上は何處までも其の人間を一人前に仕立てゝ遣らう、飽くまでも仕込んだ其の上で若し出来損つて方向に迷ふやうなことがあつたらその上は仕方がない、ものにならぬのなら例へ焼芋屋、おでん屋であらうと店を持たせて喰ふ道だけは授けてやらう、若し當の相手が稼いで内が困るなら親達にまでもひもじい思ひはさせまいといふ親分氣質ですから、自然其の一舉一動の上に嚴重な監督と其のお小言が必要だつた譯なのでせう。ですから私に限らず一旦其の弟子達の世話を引き受けるとなつたら、もう中途半端な事なんかして置かず徹底的に其の者の一人前になるやうにと仕込むのです。従つて其の小言なり仕附けなりが嚴格ですから、始めから眞底崇拜して薪を樵り水を汲む考へのものでなければいけなかつたし、又第一さういふ考へのものでなければ續かなかつたのです。つまり口頭で何やかや論ずるよりも尻端折で働く氣のも

のでなくてはならなかつたし、文章にしてからが朱筆より氣合で習ふつもりでないと、兎角ゐなくなつたりわきへいつたりするやうなことになるのです。随つて、自分の出世をする爲の方便としたり或は其の時限りの都合上で來たり、乃至自分の書いたものを早く活版にしたかつたり、直ぐに原稿料を望んだやうなものは、其のお小言や其の眼玉やに堪へなかつたのです。

文章の上ばかりでなく其の日常に於ても間拔けた事をやればそれは手巖しい劍突を喰ひました。併し其の劍突は其の時限りでいつまでも其の事で氣を悪くしてるやうな事はありませんでした。最初は殴り倒すやうな劍幕でも、其の當人が小さくなつて玄關の隅にでも悄げてゐると、先生は二階から下りて來て「おい湯に行くよ」といつたやうな調子で一緒に連れて行つて呉れたのです。其の容子が又、今のさきあんなに怒つてた人とはどうしても思へない位さば／＼したものです。ですからどんな不出かしをやつても決して針の筵に坐つてるといふやうな居辛さを感じずる事は些もありませんでした。

「誰が紹介した」

先生は又御自分の御病氣は些つとも氣になさいませんでした。が他人が煩ひでもすると、そら醫者へ行け、そら薬を買へーと直ぐにも死にでもする病人のやうに騒いで下さいました。何も其れが其の者一人のみでなく、其の者の縁續き乃至は友人にまで及んでゐるのです。若し、私の友人でこれ／＼の者が困つてゞもゐるといふやうな事でも耳に入ると、其の友人の身の上をまで心配して下さるといふ人でした。それから時には私の許へなり、又誰の處へなり、先生にお世話になりたい紹介して欲しいと云つて來るやうな者があります。さういふ時、豫て其の者の性行を知つて、面白くない人物だと思つても、私達としては先生の御氣性に對し好い加減なことを云つて追ひ返すことは出来ない。兎に角取り次ぎます。すると先生は御迷惑でも大概取り上げて下さいますが、そんなのが又得てしてぼろも出すものです。さうなると私達も黙つて見て計りも居れないから「餘りお近づけになりません方がー」とても云はうものならそれこそ手酷いお叱りを受けて了

ひます。

「せうかい紹介したのは誰ただッ」
て。

「墓石を押し倒せ」

先生の逸話となると餘りに多いので、差し當りどれとどれなど、數へては申されない位です。私どもがまだ玄關に居た時分には「メンコ」なぞをおもちやになすつたこともあるし、運動の爲と云つて薪割をなすつた事もある。それから巖谷さんや岡田さんなど、擊劍を盛におやりになつた事もあります。雨の日なぞ疊仕合と云つて座敷の中でやつとうの打ち合を始められるので、これには大分お奥から苦情が來ました。それから春、凧をお揚げなさいますのに、御隠居所の廊下の上の出張の瓦屋根の上にお登りになつて絲をたぐるので私が下にゐてあふるのです。絲目がお庭の樹にからまつたり、又尾が鄰りの大信寺の墓石にまとひついたりする。そして其れが若しうまく上らないと大癩癩で「其の墓石を押し倒せ、氣が利かないなツ」そんなことは度々でした。

逸話としては未だこんな處ではないのですが、餘り長くなりますからこれ位で止めに致します。